

現地社員を社長に抜擢

2003（平成15）年、フィリピンの合併会社を解消し、マニラから南50キロのカランバ市の輸出加工区に新工場を完成させた。ローズ・アンドリオンが初出勤する日、私は現地入りしていた。するとローズは運転手付で出勤して来たのだ。

車から降りたローズに「フィリピンという国は、部長がオーナーの許可を取らずに運転手を付けられるのか」と注意するといきなり泣き出した。そこで謝罪するのかもしれない、「辞めさせていただきます」という言葉が返ってきた。前任者の急逝に伴って、急ぎよ駐在した弱冠33歳の川崎剛司は困惑していた。

ローズがいなければこの会社はやつ

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 33



チャリト・プラザ経済特区
長官（中央）、ローズ・ア
ンドリオン（右）と

ていけないと思ったのだろう。私もそう思っていた。6年間信頼し、可愛がってきた彼女の離職はないという判断のもとに賭けに出た。若い川崎が今後、彼女の言うがままになることを心配し

国籍は関係なし できる人をリーダーに

彼女は3カ国の当社グループの中で極めて優秀な管理職であり、昨年6月、フィリピン現地法人の社長に抜擢した。フィリピン以外に海外進出は考えていなかったが、インドネシアの財閥・アルマダ社から猛烈な誘いを受けたことから、回国に合併会社を設立し14（平成26）年に操業を開始した。日本の本社が多忙なため、インドネシアでの教育はフィリピンの技術者が受け持った。金型設計製作から品質管理までフィ

リピン人だ。現地スタッフの語学力が予想以上に高かったため、技術移転は日本人が教育する以上に早く進んだ。16（平成28）年度にはローズが2度現地を訪問し、決算書を作成した。

フィリピンとインドネシアでは当然、税法などが異なるが、両国の違いも調査した上で完成させたものだ。日本人にはできないこのような業務を行えるローズがまぶしかった。ローズを社長にした理由もそこにある。100%日系資本でローカル社員が社長になった例はあまりないというが、どの国の者であれ、できる者がリーダーになることは時代の流れだ。意外だったのは、現地の120人の社員全員がローズの社長就任を喜んだことだ。ローズは以前にも増して業務に専念している。